

第3期大和市多文化共生会議 第16回会議録(要約)

日時: 2014年8月9日(土)14:00~16:00
場所: 大和市役所分庁舎2階会議室
出席: 委員(新井政則、石間フロレリサ、伊藤裕子、稲福スーザン、岡崎チャーメイ、菊池健一、宮嶋耕治) / ファシリテーター 清水睦美 / 大和市国際・男女共同参画課(折笠美穂子、原田和徳) / 公益財団法人大和市国際化協会(田中弘子、小西永里子、石川和友) 以上13名
欠席: 委員(伊藤素美、小林ホルヘ、ファン チィ フォン、山田静娥)(敬称略)

1 多言語支援センター設置・運営訓練の報告

事務局から資料に基づいて 7月26日に行った多言語支援センター設置・運営訓練について報告した。

- ◎言語ごとにグループをつかった。タイ語、カンボジア語、ラオス語の3言語は1グループとなり、英語、スペイン語、中国語、ベトナム語、タガログ語とあわせて6グループで作業をした。
- ◎各グループで災害情報を選び取り、やさしい日本語に直したり、翻訳した情報の提供を行ったりした。情報提供に関して、facebook や掲示板、FM やまと、ホームページなど、それぞれのグループで発信先を決めて作業した。最後に各グループから作業の内容を報告した。

訓練のまとめ

ファシリテーターの清水氏に当日のアンケート結果についてまとめてもらった。その後、出席者で意見交換を行った。

- ◎やってみてどういうことなのか初めてわかるので、まずはやるのが大切。また、訓練は1回だけでなく、繰り返しやるのが大切という意見があった。今回の訓練はよくなったという回答はなく、この訓練が大事だということを全員が理解していた。今後の課題は、この訓練をどう位置付けて継続してやっていくかということ。
- ◎自分たちは多言語支援センターに集まるのかどうなのか、よくわからない、という意見があった。国際化協会のボランティアやこの会議の委員などが災害のときに支援ボランティアになるのか、また、その他の外国人支援団体は、地震が起きたときにどう関わっていくのか。ボランティアの登録制度を含めて、整理していく必要がある。

- ◎翻訳に必要な情報を選ぶことがむずかしかったようだ。まず、翻訳そのものがむずかしかった。やさしい日本語にすることは日本人でさえもむずかしいという意見があった。
- ◎リーダーをどのように決めるのか。リーダーを決めると、その人の意見が前に出てしまうため、決めたほうがいいのか、そうではないのか、2通りの意見があった。
- ◎その他に、避難所運営や巡回の訓練もしてみたい、多言語支援センターのことをどのように外国人に知らせていくか、といった意見もあがった。今まとめたことは、この会議の成果を報告するにあたって、ポイントになってくる。

だれ 誰がリーダーになるか

- ◎委員(フィリピン): 日本語教室の支援者はやさしい日本語に慣れているので、割と簡単にやさしい日本語に直していくことができた。また、リーダーは他のメンバーよりもいろいろな知識を持っている人がふさわしいと思う。先日の訓練では、リーダーがよかったので、作業がスムーズだった。誰でもリーダーになれるといいが、知識のあるなしで、仕事の量やスピードはだいぶ変わってくるだろう。
- ◎ファシリ: 今の話を受けて、2つ考えることがある。災害が起きたときに知識のある人がいるか、という問題が1つ。今回は訓練であることが、前もってわかっていた。訓練のときは、できるだけみんなが知識を持てるようになることが大切。しかし、災害現場に知識がある人がいるとは限らないので、いる人でやらなくてはならない。
- もう1つある。ベトナム人のグループでは、情報を選ぶときに意見が分かれた。家族がどこに避難するかが重要だから、避難所のお知らせが先だとする人と、火事やインフラのお知らせを先とする人で折り合いがつかなくなった。私が仲介に入ったが「日本人には分からないだろうけれど、家族の居場所を知りたいと思うのは当然」と言われた。
- ◎委員(ペルー): 訓練なのにそこまで意見が対立するのであれば、実際に災害が起きたら、もっと対立が起きてストレスになるだろう。
- ◎委員(フィリピン): 人数が多ければ役割が分担できるので、あまり問題にならないかもしれない。
- ◎ファシリ: 誰がリーダーになるかによって、自分の意見が反映されたかどうか、などメンバーの気持ちに影響を与えてしまう。ベトナム語グループの意見のうち、どちらがよかったのか、今考えてもよくわからない。ひとつの改善策としては、避難所など、前もってわかっているものについては事前に準備しておくこと加えて、ベトナム語で書かれた市内の地図など簡単なものであれば準備できる。
- ◎委員(フィリピン): 確かに事前に準備できることはあるし、災害のキーワードなどは役に

た
立つかもしれない。

まえ じゆん び 前もって準備しておく

○委員(日本): やさしい日本語にしても翻訳にしても、前もって時間のあるときに準備できることはかなりあると思う。先日、相模原でも訓練をしていたが、他の地域で参考になるものはたくさんある。実際の災害では、リーダー決めがリアルな問題になる。ラオス、ベトナム、カンボジアなど国によっては、年上の人やゆずれないところもある。いろいろな体験や資料を参考にして、災害が起きてしまう前に用意しておきたい。

○委員(日本): やはり、事前にたくさんの方が用意できると思う。多言語に翻訳できるソフトを事前に用意しておけるのではないだろうか。言葉を入力したら、多言語に翻訳できるようなソフト。もしそうしたソフトがあれば、どの自治体でも使えるのではないか。

○大和市: 今回の訓練でも多言語の参考資料があるといいかも、という意見があったが、まずは参考資料なしで訓練に臨んだ方がよいという考えがあった。

○ファシリ: 自分も日本人なので、どこでも使えるものがあるといいだろう、と同じように考える。しかし、「避難所の翻訳が先だ」とかたくなに主張するベトナムの方を目の当たりにすると、大和市ならではの翻訳集も必要だと感じる。日本のどこでも使えるような多言語の翻訳資料も便利だと一方では感じつつも、大和市ならではの災害パンフレットのようなものがある。

○大和市: この前の訓練では、地図に火の絵を書いて火事を表していたグループがあったが、絵は言葉を超えて通じるものがある。市では、多言語の防災カードを作ろうと検討しているところ。ほかの自治体でも作っているが、地図を載せているところは少ない。

○ファシリ: 一人一枚、地図がほしい。おりたたんだスタイルのもの。

○委員(フィリピン): この多文化共生会議が終わるまでに、先ほど話のあった大和市ならではのものなど、何か成果物ができるといい。

ひ なんじょ 避難所について

○委員(日本): 林間小学校の入り口にある表示が出ていた。よく思い出せないが、緊急時に寝泊まりできる場所という表示だった。そこには「避難所」という言葉はなかった。そういう場所があるということも、マップにのせるといいのでは。自分の場合、避難経路では遠くまで避難しなくてはいけませんが、できれば近くにある林間小がいいと思っている。

- ファシリ: 基本的には一番近いところに逃げるといい。お寺が避難所になることもある。
- 委員(日本): 中央林間小学校は相模原市との市境にあるが、市外の人の対応はどのようになるのだろうか。
- 委員(日本): 中央林間駅では帰宅困難者が多く発生するはずで、大和市民以外も多いことだろう。先日見学した私立学校では、帰宅困難者を受け入れることを想定していた。
- 大和市: 実際に3年前の震災では、市の施設である生涯学習センターに帰宅困難者を誘導した。通勤途中の駅で降ろされて、大和駅周辺に土地勘のない人が多かった。
- 委員(日本): また、すべての言語に対応することはむずかしいので、絵で指さし誘導みたいなことができたらいいかもしれない。手話も国ごとに異なる。
- 大和市: 駅や空港などでは、日本語がわからない観光客向けに絵(ピクトグラム)を使った表示が増えている。

支援すること、管理すること

- 事務局: 先日の訓練で時間に追われながら翻訳作業をしたが、テンションがあがってすぐ疲れてしまった。多言語支援センターができたとき、スタッフは何日ぐらい頑張れるのかなと思った。毎日続くとどうなってしまうのだろう。どれぐらいの人が必要で、どれぐらいのことができるのか、みなさんはどう思ったか。
- 委員(フィリピン): 知らない人ばかりが集まって作業をすると、一日くらいしかもたないかもしれない。
- 事務局: さらに、自分たちも家族のことを心配しつつ、どこまで頑張れるのだろうか。
- 委員(日本): 以前、生活ハンドブックをラオス語やカンボジア語に翻訳したことがあったが、翻訳の仕上がりに批判が絶えなかった。やさしい日本語にしても、グループの中で意見が分かれるとなかなかたいへん。ある基準を設けることが必要ではないか。
- 大和市: 被災してしまうと大和市の人だけで翻訳するのはきびしい。はじめから外部の被災していない人たちの協力を得ることを考えてマニュアルをつくる必要がある。
- ファシリ: そうしたマニュアルは、多言語支援センターを運営する市役所や国際化協会が考えるべき問題。正義感に燃えてボランティアに来る人が自分をコントロールすることはできないので、運営する人から休むように指示するなどして管理していくことが必要。東日本大震災の被災地をみて思ったのは、不平や不満がたくさん出てくるのは当たり前のこと。うまくいなくて当然というつもりでやっていく覚悟が必要。

- 委員(日本): 不平や不満がボランティア同士に向くのではなく、大和市や国際化協会に向かなくてはならない。
- ファシリ: 最悪だったケースは、もめごとがひどくなり、地元の人がコントロールできなくなって、外部である神奈川県の職員に避難所の運営を丸投げしてしまったこと。
- 委員(フィリピン): 上手いかわなくて当然という心の準備が必要。
- 委員(日本): 災害になると全員余裕がなくなる。みんながボランティアなのよ、という点を忘れないようにしたい。
- 委員(ペルー): 緊張感もあるので、みんなちよつとしたことで怒ったりするのは、もう当たり前だという心構えがいる。
- 委員(フィリピン): 「うまくいかないべき」で、うまくいこうとばかりするとストレスがたまる。
- 委員(日本): リーダーの存在が大事だ。
- ファシリ: 逆に、周りがリーダーをつくることもある。皆がリーダーを支えていく視点も必要。

グループにおける自分の役割

- 事務局: 先日の訓練で、全員が初顔合わせのグループはどうだったか。
- 委員(日本): やはり最初は何が重要かをめぐってもめた。ところが、途中からだんだんまとまっていった。ただ、一人ひとり別の言語で翻訳していたので、そのスピードがばらばらだった。
- 委員(ペルー): スペイン語チームの場合、2人一組で役割を分担してうまくいった。スペイン語にする人、パソコンに打ち込む人の役割が明確だった。周りの人が作業している内容を考えて、自分の役割を探した。
- 事務局: タガログ語チームはどうだったか。
- 委員(フィリピン): 訓練をやりながら、不安と学びの両方を感じた。実際に災害が起きたら私はどこにいるのか(家にいるのか、センターにいるのか)ということ考えた。おばあさんは足が不自由なので、不安がある。学んだことは、情報の選び方。同じ情報を2回翻訳しないように翻訳したかどうかを記録することが大事なことだと思った。自分がタガログ語に翻訳した情報は文章になってしまったが、短い単語で情報をお知らせする方法でもよかった。それから、フィリピンで話されている言語は、英語、スペイン語、タガログ語のミックスなのだが、全部タガログ語にしまうとフィリピン人でもわかりづらい。タガログ語のみでなく、英語やスペイン語のミックスでもいいので、わかりやすい表現がいいと思った。

- 委員(フィリピン): タガログ語の中にはむずかしい言葉があって、むしろ英語の方が通じやすい言葉もある。

電話はつながるのか

- 委員(フィリピン): 市立病院の電話番号をタガログ語でお知らせしたが、たとえ電話ができたとしても、日本語ができない場合はどうするのか疑問。
- 委員(ペルー): 多言語支援センターとなる国際化協会の電話回線は1つだけか。
- 事務局: FAXを含めると回線は4つある。衛星電話などはない。
- 大和市: 市では電話線が切れても、通信衛星でつながる携帯電話を10数台は持っている。
- ファシリ: 多言語支援センターにも1台くらいあるといい。
- 委員(ペルー): 回線が少なく、つながりにくいようであれば、外国人に向けて電話してくださいとはあまりお知らせしにくい。

情報を整理する

- 事務局: 英語グループはどうだったか。
- 委員(日本): 情報が細かすぎて、選ぶのが大変だった。健康保険の情報などは発生直後には必要ないのではないかと思った。
- ファシリ: 市があらかじめ用意している情報であれば、比較的早く出てくる。市は情報を早く提供する役割があるので、情報の整理は受け手がやるしかない。
- 大和市: 市には消防、県などいろいろなところからの情報が次々と入ってくるため、あらかじめ用意している情報はすぐに提供する。
- 委員(フィリピン): 日本人ボランティアがいなくて、外国人ボランティアだけの状況になったらどうするか。あまり考えられないが。
- ファシリ: 日本語が少しはできる人が、できない人を助けることになる。東日本大震災では、津波がせまっているとき、中学生が保育園児をかついで避難した事例があった。弱者がより弱い立場の人間を助けるというケース。
- 委員(日本): 英語グループでは、情報をカテゴリー分けして、みんなで手分けして進めた。
- 委員(日本): われわれのグループは手分けしたわけではなく、みんなで全部読んでから情報を選んだ。自分のチームではリーダーがしっかりしていた。
- 委員(フィリピン): タガログ語チームでも最初はみんなが読んで、情報を選ぶべきだと

おも ひとり じょうほう えら さぎょう ほう はや ほか
思っていたが、やはり一人が情報を選んで作業をした方が早かった。そのあと、他の
ひと ひと にほんご ご ほんやく てじゆん おな さぎょう
人がやさしい日本語とタガログ語に翻訳する、という手順。みんなが同じ作業をする
ひつよう
必要はない。

○ファシリ: 情報が次から次へと出てくるので、やはり情報を管理する人が必要になってく
る。最初はどうしてもまとまらない。半日ぐらいしたら、例えば、大阪の方で外国語の翻
訳をしてくれるシステムができあがるかもしれない。あとは、センターを運営する側がど
ういう指示をしていくかにかかってくる。

○委員(日本): 外部で翻訳してくれる方々の連絡先はまとまっているか。

○大和市: 多文化共生マネージャー全国協議会という組織があり、仙台の多言語支援
センターにスタッフを派遣するなど災害時の支援実績がある。外部に翻訳を依頼した
りといった支援の形が考えられる。

○委員(日本): 緊急に対応できる人はいるか。

○ファシリ: システムとして考えられるのは、ひとつは顔の見える距離にいる登録ポラン
ティアの活用と、もうひとつは他団体と協定を結んでおくということが考えられる。

○大和市: 市は他市と災害時の支援の協定を結んでいる。

○ファシリ: 協定を結んでいる市とどの言語について調達が可能なのか、確認をとってお
くなどしてシステムをつくっていくということになるだろう。大雨が降ることもあり、どこで災
害が起きてもおかしくない。

2 大和小地区四自治会ミーティングについて

事務局から8月の宿泊訓練に参加できなくなったことを再度報告した。

◎宿泊訓練について、今回は外国人を含めて多文化共生会議委員の方の参加はでき
ないことを確認した。今回の宿泊訓練は、自治会メンバー初めての試みであるため、
外部の人の受け入れまで考える余裕がない。

◎本日の訓練は台風の影響で中止となったようだ。予定では、8月に避難所運営委員
会がたちあがるとのこと。

◎子どもが参加した場合には花火などのことも考えていたようだが、実際は参加者がい
なかったようだ。

(意見)

○ファシリ: 昼間に災害が起きたら、地域に残っているのはおじいさん、おばあさんや専
業主婦のお母さんたちになる。そんなとき、小中学生も防災の担い手として期待でき
るので、もっと訓練にも参加できるといい。

- 委員(フィリピン): 中学生は通訳や翻訳のサポートもできる可能性がある。
- 委員(日本): 自分の勤務する介護施設に中学生が職場体験に訪れた。3名がお年寄りの話し相手になったり、食事の手伝いをしたり、職業体験を行った。国際化協会や市で社会教育の一環として、中学生を防災訓練に参加させるような取り組みがでないものか。災害が起きたら、中学生は十分に支援の担い手になりうるので、防災意識を高める取り組みができればいい。
- ファシリ: まずは、避難所訓練への参加を促す。その他に、いま学校では薬物のことなど、教科の学習以外にも取り組むべき項目があるので、その一つに例えば、避難所でのサポートなどを盛り込むことができるのではないかと。まずは防災教育を各学校でどのようにしているのか、調べてみる必要がある。
- 東日本大震災の話だが、避難所の自治会の人たちが小学生や中学生に仕事を割り振ったところがあり、そうした避難所はうまく回っていた。「子どもは家族の責任でみてください」という指示があった避難所では、暴れた子どもが出てしまった。大和市の場合、避難所の運営の前に、まずは立ち上げるという段階だが、避難所運営における子どもの役割といったことは見逃されやすいところ。

3 大和市総合防災訓練について

- ◎8月23日(土)9時から深見小学校で行う総合防災訓練に参加する。
- ◎企画案として、3つ考えている。①やさしい日本語の実演。先日の訓練でやさしい日本語にすることがむずかしい、という意見が多かったため。②クロスロードゲームの実施。災害が起きたとき、他人がどう考え、行動するのか、ゲームを通して参加者同士で意見を交換する。③「地震に自信を」や翻訳対比表などの多言語資料のほか、国際化協会で作成する外国人支援ハンドブックを配布する。

4 今後のスケジュールについて

かい 回	にちじ 日時	ないよう 内容
だい 第17回	がつ 8月23日(土)	やまと し そうごうぼうさいくんれん 大和市総合防災訓練@深見小学校
だい 第18回	がつ 10月18日(土)	かいぎ 会議
だい 第19回	がつ 11月15日(土)	かいぎ 会議
だい 第20回	がつ 12月20日(土)	かいぎ 会議